裕仁皇太子の欧州御外遊と日白関係史
――ベルギー訪問の意義――

*飯島　直樹

Crown Prince Hirohito's European Tour and the History of Japan-Belgium Relations: Significance of the Visit to Belgium

Naoki IIJIMA *

抄　録

本稿では、一九二一年の裕仁皇太子（のちの昭和天皇）による欧州御外遊について、ベルギー訪問の決定過程に焦点を当てることで、皇太子御外遊の外交的意義を考察した。皇太子の御外遊に際して、ベルギーは積極的に皇太子来白を招請し、皇太子のベルギー訪問を実現させた。ベルギー側の熱心な招請運動の背景には、当時の日白間の懸案事項だった公使館昇格問題の進展と、日本軍艦のアントワープ入港の実現によって第一次世界大戦後のベルギー海軍創建の足掛かりとする思惑が伏在していた。皇太子の来白実現は、親善交流という意義だけでなく、第一次世界大戦後に永世中立による伝統的な対外政策を転換させたベルギーによる外交的・軍事的意図も包含したものだったのである。

キーワード：裕仁皇太子、御外遊、ベルギー、オランダ、第一次世界大戦、安達峰一郎

1．はじめに

一九二一（大正一〇）年三月三日、皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）は横浜を出発し、御召艦の戦艦香取、御付艦の戦艦鹿島を従えて、欧州に向けて旅立った。欧州御外遊の始まりである。皇太子はイギリス・フランス・ベルギー・オランダ・イタリア、ローマ教皇庁を訪問し、半年後の九月三日に帰国した。裕仁皇太子は、御外遊によって欧州を肌で体感すると同時に、各国王室と交流を深めることで、立憲君主としての自覚を高めていった。

日本国内でも各国を訪問する皇太子の様子が大々的に報じられ、若き皇位継承者たる裕仁親王の存在が国民の間で浸透していくことになる。折しも大正天皇の病状が進行し国民にも公表され

*　筑波学院大学経営情報学部非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

る状況において、さらに大正デモクラシーの隆盛や第一次世界大戦後のドイツの共和制移行といった世界的な君主制の危機など、日本の皇室を取り巻く内外の環境も大きく変動する中で、宮内省は国民に開かれた「新しい皇室像」を模索していた。こうした中で行われた皇太子御外遊は、まさに「新しい皇室像」の象徴と位置付けられるものであった[1]。

ところで、裕仁皇太子の欧州御外遊は結果だけみれば成功といえるものだったが、実際に外遊が決定するまでのプロセスは、根強い反対論などもあり紆余曲折した末に決定されたものだった。外遊が正式決定された後も、実際の訪問国選定は、日程調整や皇太子の身の回りの安全確保といった様々な要因によって、二転三転していた。三月一〇日の出発時にはイギリス・フランスへの訪問が決定していただけで、その他の国は検討中のまま外遊が始まった。その後、前述の理由から英仏以外の訪問の取りやめが一旦は決定する。そうした中で、日本に対して皇太子の訪問を積極的に求めたのがベルギーだった。ベルギーの再三にわたる懇請によって再検討された結果、ベルギーやその周辺国への訪問が正式に決定したのである。裕仁皇太子はフランス訪問を終えた後、六月一〇日から一五日までベルギーに滞在し、イープルを始めとする大戦中の戦場などを訪問した。その後蘭仏間を移動中の六月二〇日にもベルギーを再訪、ルーヴァン・リエージュを見学した。こうしてベルギーは皇太子訪問を実現させることができたが、そもそもなぜ再三にわたり裕仁皇太子の来白を希望したのだろうか。それはただ単に明治期から交流が続いてきた日本の皇室とベルギー王室との密接な関係性[2]と、皇太子訪問という外交的儀礼に依拠するものだったのだろうか。

そこで、本稿では裕仁皇太子の欧州御外遊の日程決定過程の検討を通して、皇太子を積極的に招請しようとするベルギー側の意図を探ってみたい。欧州御外遊に関する先行研究は、前述の御外遊決定に至るまでの過程や御外遊の状況、その効果を中心に論じられてきた[3]。とりわけ、ベルギーを含めた欧州諸国への訪問決定の経緯については、主に梶田明宏氏によってそのプロセスが概ね明らかにされている[4]。ベルギーの働きかけが正式な訪問決定につながったことが指摘されているが、ベルギー側が何を期待して皇太子を迎え入れようとしたのかについては検討の余地がまだ残されている。本稿では先行研究も踏まえつつ、単なる親善交流にとどまらない、皇太子のベルギー訪問の外交的・軍事的意義を考察する。

主な史料としては、『日本外交文書』[5]のほか、宮内庁宮内公文書館所蔵の「皇太子殿下海外御巡遊記」（以下、「御巡遊記」と表記）[6]を活用する。「御巡遊記」は御外遊の公式記録として、宮内省内で編纂された史料である。宮内庁編『昭和天皇実録』（東京書籍、二〇一五年、以下、『実録』と表記）でも欧州御外遊に関する記述の典拠史料として使用されている。「御巡遊記」は、公文書類や外務省電報、関係者の回顧、日本や海外の新聞などを用いて編纂されており、『実録』には反映されていない重要な記述も含まれている。本稿では「御巡遊記」も用いながら、宮内省側の視点を軸に前述の課題を検討することにしたい。

2．御外遊訪問国の決定過程とベルギーによる招請運動

2．1．ベルギーの歴史的変遷と第一次世界大戦

まずは裕仁皇太子の訪問先であるベルギーについて、当時の国内外情勢を先行研究[7]に依拠しながら確認しておきたい。ベルギー

は隣国オランダとともに、フランスやドイツ、さらに海を隔てたイギリスに挟まれた地域であり、「ヨーロッパの十字路」とも称されるように、交通・商業・軍事など様々な観点においても要所を占めていた。それゆえに、古くから時の大国に支配されてきた歴史がある。百年戦争後ネーデルランドと呼ばれていたこの地域では、オランダ独立戦争によって北部ネーデルランドがスペインから独立し、オランダ王国を形成した。一方、南部ネーデルランド地域（ベルギー）はオランダに追随せず、スペイン統治下に置かれ、ベルギーとオランダは切り離された。その後も南部ネーデルランドの所有国は変遷し、一時はベルギー共和国の建設が宣言されたこともあったが、一七九五年にはフランスが併合した。ナポレオン戦争後、ウィーン会議開催により、五大国から成るウィーン体制と呼ばれる新しい欧州秩序が形成される。この会議で南部ネーデルランドはオランダの統治下に置かれた。こうした統治国の変遷の歴史によるベルギー特有の問題として、フランス語とオランダ語の言語問題が存在した。この問題では、公用語の問題や地域・階級間でのそれぞれの使用言語の違いなどが複雑に絡み合っていた。特にオランダ統治下のウィレム一世によるオランダ語政策は、久しくフランス語に慣れ親しんでいたフランデレンの上流階級やフランス語を母語とするワロン地域の人々の猛反発を招き、オランダ語使用が一旦無効になるなど、大きな混乱を招いた。加えてベルギー地域への重課税や、下院議員数・閣僚数のオランダ優遇などの問題が重なり、ベルギー地域のウィレム一世への反発が高まっていった。

こうした状況で、一八三〇年にベルギー独立革命が起きた。これにより、ウィーン体制の五大国はロンドン会議を開催し、オランダからのベルギー独立が承認された。国王は神聖ローマ帝国出身のザクセン・コーブルグ・ゴータ家のレオポルドがロンドン会議で推挙され、レオポルド一世として即位した。しかし、独立戦争の戦費負担とルクセンブルクのベルギー編入を要求されたオランダは猛反発し、十日間戦争が起きるなど、ベルギー独立は混乱を極めた。最終的に、オランダのルクセンブルク領有とベルギーの戦費負担を条件として、一八三九年にようやくロンドン条約が締結され、ベルギーの独立が国際的に承認された。ベルギーは、フランスとその他のヨーロッパ諸国との間の緩衝国の役割も求められ、ロンドン会議時に五大国からの要請によって永世中立政策を採ることになった。ただし、ベルギー国内のフランス語とオランダ語の公用語をめぐる問題はその後も様々な形で争点化し、歴代国王は言語政策の難しいかじ取りに迫られた。その後、レオポルド二世の時代には、アフリカのコンゴを獲得し、陸軍整備を実施するなど、対外政策にも力を入れていった。

しかし、一九一四年第一次世界大戦が勃発すると、ベルギーも否応なく巻き込まれることになる。八月四日、ドイツ軍が中立国ベルギーに侵攻したのである。ドイツはフランス包囲作戦の一環として、ベルギーの領内通過を要求した。しかし、時のベルギー国王アルベール一世はこれを断固拒否したため、ドイツ軍の攻撃を受けた。強大な軍事力を有するドイツ軍にベルギーは苦戦を強いられ、その国土の大半を占領され、ベルギー政府はフランスに亡命せざるを得なかった。それでもベルギー軍は、北海付近のフランス領に近いエイゼルで防御線を築き、ドイツ軍と膠着状態に入り、そのまま終戦を迎えた。その一方、オランダは、ドイツ軍の侵攻を事前に予期し動員令を発出するなど、侵攻に備えていたため、ドイツや他国軍の侵攻を受けることなく終戦を迎えていた[8]。

戦後、ベルギーとオランダの関係は冷え込んでいく。ドイツ占領下のベルギーでは、ナショナリズム運動が台頭するとともに、「大ベルギー」構想が唱えられるようになる。この構想は、元々ベルギーと縁が深かったものの、ベルギー独立時にオランダ領として切り離されたリンブルフ州とルクセンブルクを併合するという発想だった。一九一五年六月にベルギー亡命政府が「大ベルギー」構想を表明したものの、当然のことながらオランダの猛反発を受けて、リンブルフ州とルクセンブルクの併合を断念せざるを得なかった。[9] さらにベルギーを破壊しつくしたドイツのウィルヘルム二世がオランダに亡命し、連合国への引き渡しを拒否したことや、ベルギーを占領していたドイツ軍将兵を武装解除させ、オランダ領を通過して帰国する許可を出したこともベルギーの対蘭感情を悪化させる要因となった。[10] このように、ベルギー独立時から複雑な関係性にあった白蘭関係は、第一次世界大戦を経て急速に冷え込んでいったのである。

第一次世界大戦を経験したベルギーは、伝統的な永世中立政策を転換させることになった。前述の「大ベルギー」構想もこの延長線上で浮上した構想であったが、戦後のベルギーはイギリス・フランスと密接な関係を維持することとなる。ドイツ侵攻により甚大な被害を受けたベルギーは、戦後のドイツ賠償問題において、ドイツから優先的に賠償金の支払いを受けることになった。ベルギーは賠償金を元手に経済復興計画を企画していたが、ドイツからの賠償金が滞るようになると、一九二三年にフランスと共同出兵し、ルール地方の炭田を占領する強硬手段に出た。このように、戦後のベルギーは、オランダとは関係が悪化する一方で、戦時中に亡命政府を置いていたフランスとは特に連携する対外政策を取るようになっていた。[11]

2．2．御外遊訪問国の選定過程

裕仁皇太子の御外遊構想は、一九一九年頃から原敬首相や山県有朋ら元老、宮内省の若手官僚の間で浮上したが、貞明皇后や浜尾新東宮大夫の消極論もあった。さらに皇太子妃候補の久邇宮良子女王の色盲遺伝疑惑に端を発する宮中某重大事件や、それに連動する御外遊反対運動などの紆余曲折を経て、最終的に原や元老の主導により御外遊が決定された。[12] 一九二〇年後半から外遊に向けた具体的な検討が始まった。二一年一月段階で訪問候補国について、イギリスを筆頭にフランス・イタリア・ベルギーの欧州諸国とアメリカを訪れるプランが浮上し、[13] 同年二月頃から具体的な欧州訪問国が検討され始めた。

ベルギー訪問の検討に際して、当事者間で真っ先に懸案として浮上したのが、オランダ訪問の有無であった。外務省では、ローマ教皇庁やスペイン訪問の有無とともに、「白国皇室を訪問しながら直ぐ隣りなる蘭国皇室を訪問せられざるは如何あるべきや」と、欧州各国の大公使宛に意見聴取の電報が出されている。[14] 検討の初期段階から隣国同士かつ王室を擁するベルギー・オランダの訪問がセットで考慮されていたことがわかる。外務省からの電報に対して、石井菊次郎駐仏大使は、オランダを訪問すれば、近隣のスウェーデンやデンマーク訪問も必要となるため、今回はフランス・ベルギー・イタリアなど、第一次世界大戦における「戦争同盟国」に絞るべきと意見具申した。[15] 安達峰一郎駐ベルギー公使は、ベルギー訪問後にオランダを訪問するという案は「白蘭両国現時の関係不良なるに鑑み、白国御訪問に対する白国人民感謝の念を減少するの傾向あるを免れざる」可能性があるが、大局的には問題はないという趣旨の報告をしていた。[16] こうした白蘭関係への配慮という点では、駐オランダ田付七太公使がさらに踏み込ん

だ意見具申を外務省に送っている。[17]

皇太子殿下白国皇室御訪問の際蘭国皇室御訪問無之に於ては、蘭国皇室の感情を害するは勿論、当国上下に対しても甚しき悪影響を及ぼすべきは言を俟たず。従って日蘭国交上にも至大の関係を及ぼし折角対日蘭国の感情融和し来らんとしつつある際頗る憂慮に堪へざるもの有之、之に反して皇太子殿下の御訪問を得ば蘭国上下の対日感情は益々良好となり、日蘭両国の和親を増進すべきは疑を容れず。由来蘭国は極東蘭領の関係上兎角我国に対し猜疑心を有し居る事情に顧み将又我国が旧来蘭国民に対し特に除外的に往来通商を許し居たる古き歴史に鑑み此際皇太子殿下の蘭国皇室御訪問遊ばされんことは日蘭国交上本使に於て最も緊切のことと存す

田付は、皇太子がベルギーにのみ訪問すれば、オランダの国民感情に悪影響を及ぼすことを強く懸念し、オランダ訪問を希望したのである。このように、ベルギー訪問とオランダ訪問は密接不可分な事案とみなされていたといえる。

2．3．ベルギーによる皇太子招請運動

前述のように、欧州における訪問候補として、英仏を中心にベルギー・オランダ・スペイン・イタリア訪問が検討されることになった。しかし、この時期のイタリアでは戦後の生活苦による労働者によるストライキ拡大といった社会不安に覆われ、社会党勢力が拡張していた。こうしたイタリアの不安定な状況を踏まえ、皇太子の身辺を案じる牧野伸顕宮内大臣の意向により、三月二日、英仏以外の訪問は一旦白紙となった。イタリアを訪問しない以上、その権衡上ベルギーなどの訪問も取止めざるを得なかったのである。訪問国が不透明な状況のまま、翌日三日に皇太子一行が横浜から出港した。その後、皇太子の身辺警護の観点から三月一九日ついに牧野宮相は英仏以外の訪問取りやめを正式に決定し、内田康哉外相に通知した。英仏以外取止めの背景には、欧州の社会主義者・共産主義者のほか、朝鮮人の独立運動家の存在が懸念材料だったことが挙げられる。皇太子一行が香港に寄港した際にも身辺警護の観点からプログラムの一部が急遽変更されるなど、ほとんど手探りの状態で御外遊がスタートしたのである。[18]

それでは、一旦白紙となったはずのベルギー訪問はどのように実現したのだろうか。注目されるのは、ベルギー側からの熱心なアプローチが目立つことである。四月二〇日、武者小路公共駐ベルギー臨時公使はベルギー外相のアンリ・ジャスパールと面会し、ベルギー国王の希望として皇太子の来白を招請された。ジャスパールは「当国は小国ながら大戦の関係上御見学の資も多かるべく、又日本に対する敬虔と親愛の情は何れの国にも勝るものあり。将又英国よりは単に半日程の近きに位し居るに付、何んとか御都合相附けらるれば非常に欣幸なり」と語り、皇太子の訪問を切望した。[19]さらに武者小路は続けて以下のような意見具申を行っている。即ち、ベルギー国内でも皇太子来白の世論が沸き起こっていることや、現地の日白協会の皇太子来白要望を報じたうえで、ベルギーの国内新聞では「大使館設置決行せられたる上に御来白の事ともならば実に此上なきことなりとて、十分日白両国の親交増進に努めんとするものも尠からず」といった声があるという。続けて「此の意気込みを挫折なからしむる為如何なる方法を講ずべきか、当方に於ては目下頻りに腐心中に有之」と、皇太子来白の検討を要請した。そのうえで、もしどうしても皇太子の来白が実現できない場合は、「御名代若くは御使御差遣相成るか、或は軍艦を当国一港に御派遣相成るか其他十分鄭重なる方法を講ぜられ

以て当国皇室の好意を謝せられ、且一般朝野の敬意を認めらるる様致したし」というように、皇太子の来白が困難であれば、代替策として名代か日本軍艦の派遣を求めたのである。[20]

さらに、ベルギー側から日本側へのロビー活動も盛んに行われた。例えば、五月二日、ロンドンで林権助駐英大使がジャスパール外相と面会した際に、皇太子訪問の招請を受けた。林はその模様を報告しつつ「白側の希望は強ち外交的辞令と看做し難きを以て御渡仏の序を以て御訪問の義可然やと思考せらる」として、ベルギー訪問の検討を意見具申した。[21] さらに、ジャスパール外相はベルギーに帰国した後、安達公使に対してもベルギーは仏国戦線からも近く、戦線視察のついでに立ち寄ることも可能なので、「当国戦後の実況は是非皇太子殿下の御一覧を御願申上度当皇帝陛下の御熱望」を伝達しており、安達も「皇帝陛下を御初政府人民挙りて皇太子殿下の当国御立寄を熱望し百方其手段を尽しつつあるにも不拘、遂に何等の御沙汰に接せざる場合に於ける当国失望の程度察するに余あり、国交の将来にも影響せざるやを懸念」すると報告している。[22] その間にも皇太子一行の行程は進み、五月にはイギリスに入り、同九日バッキンガム宮殿における公式晩餐会に臨んだ。[23] その席上、駐英ベルギー大使は皇太子に「皇帝陛下より是非殿下に同国御訪問之ありたき旨」と、フランス戦線より近いため短期間だけでも訪問を願う旨を直接言上した。[24] このように、ベルギー側は訪問中止決定以降も、外相を中心として様々な機会を捉えて日本側への積極的なロビー活動を展開し、皇太子訪問を実現しようとしていたのである。

こうした状況において、皇太子一行もベルギー訪問を考慮し始めた。バッキンガム宮殿での晩餐会の翌日一〇日、林権助駐英大使と供奉長の珍田捨巳侍従長、閑院宮載仁親王ら供奉員が協議した結果、ベルギー訪問の詮議を牧野宮内大臣に願う旨の電報を発出した。[25] その主な内容は、①ベルギーから再三の招請に対して単に日程の余裕がないという理由だけでは断るのは厳しいこと、②日程変更の懸案となっているイタリアについては、最近の国内状況は平穏であり警備も厳重であるため、皇太子の身辺には問題なく、訪問に支障がないと思われること、③イギリスでの三週間の滞在よりもフランス滞在が長びくと「対英感情上面白からず」、フランスに相当期間滞在したら周辺国へ出国することが適当であること、④閑院宮もイギリス・フランス以外の諸国へも訪問した方が良いとの意見であること、というものだった。林は五月一二日にもベルギー、オランダなど周辺国への訪問を催促する電報を発出している。[26]

こうした現地からの度重なる要望を受けて、五月一二日牧野宮内大臣から珍田供奉長や林大使に対して「御地に於て最近の状況に顧み充分御旅行の御安全を期待し得るに於ては白伊御訪問のことは御実行相成可然」旨が回訓された。[27] 一旦は中止となったベルギー・イタリア・オランダへの訪問プランが、ついに復活したのである。最終的に裕仁皇太子一行が訪問した国・地域は【表】を参照されたい。その後、五月一五日には林駐英大使から駐英ベルギー大使に皇太子来白決定が伝えられ、以後はベルギーとの日程調整に入った。[28] オランダ訪問については、五月一六日に林から駐英オランダ大使にオランダ訪問の方向が伝えられたが、オランダ大使はこの時も「蘭白間の関係に言及し両国の間に区別を立つる不利を切言」するなど、ベルギーとオランダで差がつかないように最後まで警戒していた。[29]

以上のように、ベルギー訪問の背景にはベルギー側の粘り強い招請活動があり、その成果が訪問決定に結びついたといえる。そ

れでは、なぜベルギーはそれほどまでに皇太子来白を熱望したのだろうか。ベルギー側からみた皇太子訪問の意図は、単に国内世論の高まりによるものではなかった。その裏には主に二点の意図があったと考えられる。

【表】　欧州御外遊各国・各地域訪問滞在日程（1920年）

3月3日	横浜発
3月6日	沖縄
3月10日～13日	香港
3月18日～22日	シンガポール
3月28日～4月1日	セイロン
4月15日～21日	エジプト
4月24日～26日	マルタ
4月30日～5月3日	ジブラルタル
5月7日～30日	イギリス
5月30日～6月10日	フランス
6月10日～15日	ベルギー
6月15日～20日	オランダ
6月20日	ベルギー（再訪）
6月20日～7月7日	フランス（再訪）
7月11日～18日	イタリア
7月18日～9月3日	復路
9月3日	横浜着

【出典】『昭和天皇実録　三』各日条を参照。

3．ベルギーにおける皇太子訪問の外交的意義

3．1．駐ベルギー日本公使館昇格と大使交換問題

一点目は、第一次世界大戦後の日白間で懸案となっていた公使館昇格問題への影響があげられる。[30] ベルギー国内新聞でも公使館昇格が実現するタイミングでの皇太子訪問を期待する声が報じられていたことは前述の通りであるが、日白間外交の次元でも公使館昇格問題と皇太子訪問は密接な関係にあった。

第一次世界大戦後、大きな災禍に見舞われたベルギーは、国内復興と同時に外交関係の刷新を画策していた。その一環として、各国の公使館を大使館に昇格させる方策をとったのである。フランス公使館の昇格に始まり、一九一九年一〇月段階でイギリス、イタリア、アメリカが昇格を実行し、さらにスペイン、ブラジルの昇格も予定されていた。日本に対してもベルギーは安達公使を介して、大使の派遣を打診した。その後交渉が進み、同年一〇月日本は列強の動きに合わせて公使館昇格を閣議決定した。

しかし、昇格に伴う費用などの問題が足かせとなり、日本はすぐに昇格させなかった。これに対してベルギーは安達公使を通して早期昇格を何度も日本側に求めた。その甲斐あって、二〇年一〇月に公使館昇格が改めて閣議決定され、予算案にも費用が組み込まれた。次に日白間の大使交換問題が浮上し、ベルギーはフランスなどの先例に習って、日本側の駐ベルギー大使任命後に駐日大使を送ることを想定した。しかし、大正一〇年度予算の議会通過の都合から、日本はすぐに大使を任命しなかった。痺れを切らしたベルギーは同年一二月にアルベール・ド・バッソムピエールを新駐日公使に任命し、翌二一年五月東京に派遣したものの、やはり議会での予算通過を待つ日本側では特別な動きがなく、それ以上の進展は見られなかった。その間の二一年二月にはベルギーとブラジル間の大使交換も完了していた。

このように、公使館昇格問題は依然として膠着状態が続いていたが、問題が急速に進展する契機となったのが、皇太子のベルギー訪問だった。五月二〇日ベルギーのジャスパール外相は、安達公使に在日ベルギー公使館昇格の実現を申し入れ、同二三日には日本が新任のバッソムピエール駐日公使の大使就任を承認した。なお、実際の大使任命は六月一一日、信任状奉呈は九月一五日に行われた。[31] 駐ベルギー公使館については、皇太子訪問にあたってベ

ルギー側が安達らの待遇を考慮し、正式昇格を待たずに大使館扱いとする旨を日本側に伝達した。さらに、裕仁皇太子の来白前に安達を大使として承認するために、信任状の代わりに電報原紙の奉呈で代替することを発案した。こうしたベルギー側の異例の配慮により、五月三一日付で駐ベルギー公使館は大使館に昇格し、皇太子到着当日の六月一〇日、安達は電報原紙をアルベール一世に奉呈し、アルベール一世は大使承認が「皇太子殿下の御来白と時期を同じくするを大に欣幸」と述べ、これを承認した[32]。こうして、安達は正式に新駐ベルギー大使に任命されたのであった。以上のように、皇太子訪問は、停滞気味だった日白両国の公使館昇格を決行する絶好の機会であった。停滞気味だった両国間の公使館昇格と大使交換問題は、皇太子訪問によって円滑に解決されたのである。

3．2．日本軍艦のアントワープ入港希望

ベルギーにとっては、公使館昇格問題のほかにも重要な課題があった。その二点目の意図が、日本軍艦のアントワープへの入港希望だった。アントワープはベルギー最大の通商港であり、ヨーロッパ有数の港でもある。日本との関係性も深い。一八九六年日本郵船が横浜―アントワープ間の定期航路を開設して以来、日本にとって最初の欧洲最終寄港地として重要な拠点だった[33]。

ベルギー訪問が中止となる以前からアントワープ港への皇太子と日本軍艦の訪問がベルギー側からの希望として日本側に伝えられていた。二月中旬段階における皇太子外遊の具体的な日程[34]は、三月三日横浜発、五月一日～一九日英国滞在、同月二二日～三一日仏国滞在、六月一日パリ発ブリュッセル着、六月二日～五日ベルギー滞在、六日ブリュッセル発デンバーグ着、七日～九日蘭国滞在、一一日フリシンゲン発、一二日航海、一三日サン・セバスチャン着、という形で検討されていた。こうした日程案を受けて、駐ベルギー公使の安達は次のような電報を送った。

〔皇太子〕殿下には当国より蘭国に向はれ、仝国「フラシング」より御乗艦、直に西班牙国に向はせらるる御予定と拝承する処、当国に於ては戦後上下挙りて海軍建造の必要を感じ鋭意画策中に之あり、一昨年白国皇帝陛下が佐藤〔皇蔵〕少将一行の為めに催されたる御晩餐会に於ても特に其の率ゐらる小艦隊を「アンベルス」港〔アントワープ港〕に廻航せしめ、白国一般人の人心を鼓舞せしめられたき旨の御言葉あり。当時の当局大臣よりも切に仝様の希望を発表したりしのみならず、其の後度々本官陛下に拝謁の際何日頃か仝様の機会なかるべきやとの御尋ねありたることあり。内閣員其の他重なる朝野の人々よりも仝様の熱望を陳ぶること屢之あり。且つ拙電第三三号前段具陳の通今般皇太子殿下当国御訪問後、休戦後当国との好情最も不良となりたる蘭国に赴かせらるることは当国御訪問の価値大に減少すべき内情に鑑みられ、尚「エスコー」河の御航行は御見学の為めにも頗る有益なることをも考慮せられ「アンベルス」港より御乗艦遊ばさるる様改めて御治定玉はらば一般国交上仕合せの儀に存ぜらる。尚万一仝港より御乗艦遊ばさるること絶対不可能の場合には殿下白国御滞在中御乗艦を一時「アンベルス」港に廻航せしめらるる様特に御取計ひ相成度稟請す[35]

安達は、ベルギー側が後述するような海軍建造の必要性といった理由から、日本軍艦のアントワープ港入港を希望していること、白蘭関係の不安定化を背景に、皇太子がアントワープ港から軍艦に乗船してオランダに向かうか、アントワープへの日本軍艦回航

を要望していた。

その後、ベルギー訪問が中止となったため、こうした意見は沙汰止みとなったが、ベルギー訪問が正式に決定し、具体的なプログラムを策定する段階になると、再び日本軍艦のアントワープ寄港要望がベルギー側から出てくるようになる。五月一九日付で安達は珍田供奉長に対して、アルベール一世の希望を伝える次のような電報を発出している。

白国皇帝は殿下御滞白中の御日程を余り御疲労をかけざる程度に於て御治定あらせられたき思召にて目下荐りに御考案中の由なるが、或は当国積年の冀望たるアンヴェルスへ日本軍艦を迎ふることを右御計画中に入れらるるやも計り難く、愈々其の申出ありたる時は右御承諾の上当国より蘭国へ赴かるる際同港より御乗艦相成ること、御順路上よりも好都合なりと思慮す。右予め御考量置相願度し。尚アンヴェルスの怠業等は既に平静に向ひたるに付来月に至らば船舶出入には何等不都合なき由なり[36]

さらに翌二〇日にもジャスパール外相が安達に「アンヴェルスに軍艦を派遣せらるる事は日本側に於て諸種の困難あるやも計られざるも、当国としては其の実現せらるる事を切望」していた[37]。こうしたベルギーと安達の要請に対して、珍田供奉長は「アンヴェルス軍艦寄港は吃水の関係上不可能なるに付、遺憾ながら実行し兼ぬる旨」を伝えた[38]。アントワープ入港は吃水の問題から不可能だという。しかし、アントワープ港への軍艦寄港を熱望してやまないベルギー政府とその意を受ける安達公使は、アントワープ港の満潮時間や出入り可能な軍艦の規模を珍田に伝えるなど[39]、軍艦入港の実現に奔走していた。さらに安達は立て続けに次のような電報も発出していた。

アンヴェルス港に軍艦御寄港の儀、吃水の関係上不可能に付御見合せ遊ばされたる趣の処、累次電報を以て申進めたる通当国に帝国軍艦寄港の件は当国朝野積年の希望なるに付、万一蘭国の一港に軍艦寄港に御決定の場合には白蘭両国関係の現状に顧みて是非オステンド又はゼーブルツにも寄港せしめらるる様御取極相成度切望に堪えず[40]

白蘭関係に配慮する安達は、日本軍艦のアントワープ入港が困難である一方で、もしオランダの港に寄港することが決定した場合には、アントワープに代わって、ベルギーの主要港であるオステンドやゼーブルッへの寄港を要望したのである。

その後、五月二七日にベルギー訪問プログラムが決定したものの、結局吃水問題が足かせとなり日本軍艦のアントワープ寄港は実現しなかった。皇太子一行の軍艦は、五月三〇日にポーツマスからル・アーブル港に入港し、六月一五日まで同港に碇泊した後、イギリス海峡にある軍港ポートランドに移動、二一日まで碇泊した。そのため、最終的に日本の軍艦がベルギー、オランダいずれの国の港にも寄港することはなかった[41]。

3．3．ベルギー海軍創建の意図と安達峰一郎の尽力

このように、ベルギーは皇太子訪問プログラムが決定される直前まで日本軍艦のアントワープ訪問を切望していた。日本軍艦寄港はベルギーにとってどのような意義があるのだろうか。まず考えられるのは、この時期ベルギーが進めていたアントワープ港の要塞化と海軍創建という課題との関連性である。アンヴェルス港と日本海軍との関係について、「御巡遊記」の記述[42]に依拠しながら見てみたい。

その歴史は一九〇二年まで遡る。イギリス国王エドワード七世

の戴冠式に小松宮彰仁親王ら日本の一行が参列した帰途、軍艦浅間と高砂がベルギーの招待で入国した際、アントワープへの寄港を切望された。海軍内では「碇泊其の他に関して梢々不安の点」もあったが、艦隊司令官伊集院五郎少将は「我が国威宣揚」のため、また一八九六年の航路開設からアントワープに寄港するようになっていた日本郵船の船を鼓舞するために、寄港を実行した。この当時の軍艦寄港の様子について、在アントワープ領事館の報告[43]によれば、近い時期にアントワープに入港したフランス・オランダ・アルゼンチンの軍艦と比べても、「如此盛大なる歓迎は当市未曽有」のことであり、寄港は「良好なる紀念」を残したと評価されていたという。熱烈な歓迎の背景には、日清戦争に勝利した日本海軍の名声と乗組員らの「謹厳なる態度」や、アントワープ市民に対して「近式の軍艦を仔細に縦覧」させるなど厚遇したことが指摘できる。

その後、一九〇七年に伊集院中将が第二艦隊の軍艦筑波、千歳から編成される遣外艦隊を率いて欧米を巡航し、その途次ベルギーを訪問した。この時もベルギーはオーステンデ港に碇泊していた艦隊に対してアントワープ港への回航を切望したが、この時は軍艦と港の吃水問題を理由に断っている。また、伊集院らは七月四日に国王レオポルド二世と謁見したが、その際国王からは「浅間高砂の五年前の巡航等に就て種々御懇話」があったという[44]。

第一次世界大戦中、ドイツの潜水艦作戦に苦慮するイギリスの要請により、日本海軍は特務艦隊を編成し、欧州に派遣した。特務艦隊のうち地中海方面を担当したのは、佐藤皐蔵海軍少将を司令官とする第二特務艦隊だった。第二特務艦隊は地中海で連合国側の輸送船団保護などの作戦に従事した。戦後、艦隊は日本への帰路で欧州各国を親善訪問することになり、ベルギーにも訪問しアルベール一世を始めとする政府の歓迎を受けた[45]。その際にもベルギー側から艦隊のアントワープ回航を要請されていた。

以上のように、日露戦争以前から機会がある度にベルギー側は日本海軍艦隊のアントワープ入港を求めていた。ではなぜ軍艦寄港にこだわったのか。「御巡遊記」では、日本海軍の寄港により「同国海軍創立の気勢を煽」ること、「同港施設の完備を中外に知らしめんとする」ことが目的だと分析する。ベルギーではレオポルド二世時代の一八五九年に軍備拡張政策の一環として、通商港として繁栄するアントワープを軍事要塞化し、一九〇六年には要塞を拡張したさらに、陸軍の拡張も進め、一九一三年には抽選制・志願制併用の兵役から徴兵制に改正し、要塞の防備を強化していた[46]。陸軍とアントワープ要塞の拡張政策が推進される一方、第一次世界大戦当時のベルギーは十分な海軍力を保有していなかった。そのため、戦後のベルギーは対外政策を転換する中で、前述の安達の電報にあるように「戦後上下挙りて海軍建造の必要を感じ鋭意画策中」であったのである。そこでベルギーは裕仁皇太子の来白に合わせて、日清・日露戦争を勝ち抜いた日本海軍の戦艦をアントワープ港に迎え入れることで、海軍建設の発揚を意図していたといえる。

日本軍艦の寄港は、オランダへの対抗意識という側面もあったと考えられる。アントワープは地理的にオランダ側に面している地域である。その地に皇太子の御召艦を率いる第三艦隊を入港させるという行動は、関係が冷え込むオランダに対する一種の示威行為にもなると考えられる。前述のように、安達が「万一蘭国の一港に軍艦寄港に御決定の場合には、白蘭両国関係の現状に顧みて、是非オステンド又はゼーブルツへも寄港せしめらるる様」と求めた意見具申には、ベルギーのオランダへの対抗意識を垣間見

ることができるだろう。

このように、ベルギーにとって、日本軍艦の寄港は海軍復興の喚起という軍事上の観点や、緊張関係にあるオランダへの対抗という観点からも意義を見出せるものだったといえる。

また、この過程で安達公使は一貫してベルギー側の要望に沿って軍艦の寄港などの意見具申を繰り返していたが、この背景には安達がこの前後の時期に開催されていた国際交通会議の総会副議長を務めていたことも影響していたと思われる。

日本とベルギーが皇太子来白をめぐって交渉を重ねていた頃、安達は三月一〇日から四月二〇日の期間、バルセロナで開催された国際連盟第一回国際交通会議において、総会副議長を務めた。国際交通会議では、国際連盟規約第二三条で規定されていた交通及び通過の自由に関する具体的な項目が審議された[47]。とりわけ、「自由通過に関する条約および議定書」や「国際河川の通過自由に関する条約」（国際河川条約）、鉄道輸送旅客及び貨物の通過自由に関する条約、船舶の入出港自由等に関する条約など、六つの条約が審議された。その総会の副議長として、当時国際連盟で活躍していた安達[48]に白羽の矢が立ったのである。安達は第一回国際連盟総会・理事会において、通商自由に関する審議の促進に努力するなど、経済的な国際協調に貢献していた[49]。

安達は分科会である国際河川条約特別委員会の担当議長を務め、本条約の成立に尽力した[50]。この会議では、国際河川における外国船の自由航行原則が定められたが、特定の場合において制限を設ける第四条や、沿岸貿易には本条約の規定を一律では適用しないとする第一六条案が提起された[51]。日本は、中国の黒龍江や松花江も国際河川として自由航行を認めることを主張していたため、第四条削除などを会議で求めた[52]。しかし、黒竜江・松花江の特例適用を主張する中国など、削除に反対する国も多く存在した。日本政府が会議開催に先立ち参加国の英仏伊蘭白に日本側主張の諒解を求めた際、安達は真っ先にベルギー政府代表に照会し、ベルギー側から概ね好意的な態度を引き出していた[53]。実際に国際交通会議が始まると、反対多数で不採用となった国際河川条約第四条削除案についても、ベルギーは当初は不賛成だったが、最終的には日本案を支持する側に回った[54]。また、日本が主張した沿岸貿易の相互開放についてもベルギーは賛成するなど[55]、会議全体を通して日本側の提案に賛同する場面が多く見られた。

こうした点を踏まえると、国際河川の自由航行や沿岸貿易相互開放の原則を誰よりも理解する安達が、前述のように、皇太子の「御見学」に資するとの理由から、アントワープ港からの皇太子の軍艦便乗と、「エスゴー河」を渡ってオランダへ入国する意見も陳述していたことが注目される。「エスゴー河」とは、エスコ―川（スヘルデ川）のことで、フランスの源流から北上してベルギー国内に入り、都市ヘントで東に転じて、最終的にアントワープからオランダを経て北海に至る河川である。安達が、欧州有数の通商港であるアントワープ港への軍艦入港やベルギーの国際河川たるエスコ―川航行の実現に尽力したことは、国際会議の場で議論された国際河川の自由航行を裕仁皇太子一行に体験させること、日本郵船の航路を有するベルギーとの連携強化という意味で有益なことだったといえる。最終的に、アントワープの軍艦入港と「エスゴー河」の航行は実現しなかったが、裕仁皇太子一行はアントワープを訪問することになった。六月一四日、皇太子一行は陸路からアントワープを訪問し、熱烈な歓迎を受けると同時に、ステーン河岸から遊覧船に乗り湾内の石油基地などの施設を視察した[56]。こうして裕仁皇太子はアントワープの見学を果たしたので

あった。

4．おわりに

本稿では、裕仁皇太子の欧州御外遊について、ベルギー訪問の背景を考察することで、主にベルギーから見た外交的意義を検討してきた。

第一次世界大戦後、日本は戦勝国の一員として、国際連盟の常任理事国として加盟し、欧州の国際秩序への参入を果たした。一方のベルギーは、独立以前から欧州の大国の支配下に属した歴史を有し、独立以降も周辺国の要請により永世中立政策を堅持してきた。しかし、第一次世界大戦でドイツに蹂躙されたことを受けて、フランスとの連携強化を進めるなど、自国の対外政策を大きく転換させることになる。そのベルギーにとって、日本との連携強化は必要不可欠であり、その過程で浮上したのが裕仁皇太子の御外遊だった。ベルギーは裕仁皇太子の来白を熱望し、積極的な招請運動を展開した結果、一旦は白紙となったベルギー訪問の実現に成功した。ベルギーが皇太子来白を熱望した背景には、①ベルギーの対外政策の転換による日本との公使館昇格と大使交換問題の進展、②日本海軍の軍艦をアントワープに入港させることで、当時は存在しなかったベルギー海軍創建という国防充実の足掛かりの構築や隣国オランダへの軍事的誇示という、二つの隠された意図が込められていたと思われる。②の軍艦入港と関連して、大正期の日本海軍が朝鮮や満州地域などを巡航し、寄港先で現地民に対して艦船の見学・便乗体験などを行うことで、日本海軍の威容を示す砲艦外交的な要素が強い巡航を展開したことが先行研究で明らかにされている[37]。こうした研究は、日本海軍側の巡航の意図に注目して論じるものであるが、本稿で取り上げた皇太子御外遊では、訪問相手国であるベルギー側が対外政策・軍事政策の一環として日本艦船の入港を希望しており、ベルギーにとっての軍事的意図を垣間見ることができるだろう。

ベルギー訪問の背景には、安達峰一郎の尽力もあった。日本は国際連盟を中心とする国際秩序に参画し、通商自由などの経済的国際協調に積極的に参画しようとしていた。その一環として、駐ベルギー公使の安達が国際交通会議の副議長として議論を牽引した。そのため、国際河川や沿岸貿易の理解が深い安達は、ベルギー側の要請を容れて裕仁皇太子のベルギー訪問だけでなく、欧州有数の通商港アントワープへの軍艦入港やエスコー川航行の招聘に尽力した。以上のように、裕仁皇太子のベルギー訪問は、親善交流という外遊としての意義だけでなく、第一次世界大戦に対外政策・軍事政策を転換させたベルギーによる外交的・軍事的な意図も色濃く反映されたものだったのである。

〔付記〕本稿は、JSPS 科研費（21J01235）による研究成果の一部である。

注

（1）この点については、坂本一登「新しい皇室像を求めて」（『年報・近代日本研究　二〇　宮中・皇室と政治』（山川出版社、一九九八年）所収）に詳しい。

（2）日本の皇室とベルギー王室の交流の歴史については、磯見辰典・黒沢文貴・櫻井良樹『日本・ベルギー関係史』（白水社、一九八九年）第八章参照。

（3）主な研究として、波多野勝『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』（草思社、一九九八年）、永井和『青年君主昭和天皇と元老西園寺』（京都大学学術出版会、二〇〇三年）、伊藤之雄「原敬内閣と立憲君主制」（一）～（四）」（『法学論叢』一四三―四～六、一四四―一、一九九八～九九年）、梶田明宏「「昭和天皇像」の形成」（鳥海靖・三谷博ほか編『日本立憲政治の形成と変質』（吉川弘文館、二〇〇五年）、伊藤学「大正一〇年皇太子外遊決定の経緯」（『法政史論』二九、二〇〇二年）、堀口修「皇太子裕仁親王の教育問題と金子堅太郎」（『大倉山論集』五〇、二〇〇四年）、同「『香取新報』にみる大正一〇年外遊時の皇太子裕仁親王」（『明治聖徳記念学会紀要』四八、二〇一一年）などが挙げられる。

（4）梶田明宏「大正十年皇太子御外遊における訪問国決定の経緯について」（『書陵部紀要』五七、二〇〇五年）。以下、本論文を梶田論文と表記する。

（5）本稿では外務省編『大正一〇年第一冊上巻　皇太子裕仁親王欧洲諸国訪問一件』（以下『日外①』と表記）、『大正一〇年第三冊下巻』（以下『日外②』と表記）、外務省外交史料館所蔵の外務省記録を使用する。なお、史料引用に際しては、原文カタカナをひらがなに直すとともに適宜句読点を付し、補注は〔〕で示した。

（6）宮内公文書館には第一章～第一二一章のほか、関連史料の「皇太子殿下御巡遊記改訂版」第一章～第二〇章、「皇太子殿下海外御巡遊記外記」第一～第一九が所蔵されている。

（7）以下の説明は、断りがない限り松尾秀哉『物語ベルギーの歴史』（中公新書、二〇一四年）序章～第三章による。

（8）栗原福也『ベネルクス現代史』（山川出版社、一九八二年）一三六頁。

（9）前掲松尾書、九七―九九頁。ベルギーはパリ講和会議でもルクセンブルク併合を主張するも叶わなかった。

（10）前掲栗原書、一四六頁。

（11）以上の説明は、前掲松尾書、九九―一〇〇頁、小川秀樹『ベルギー　ヨーロッパが見える国』（新潮選書、一九九四年）六八―六九頁。なお、ドイツでナチス台頭と再軍備が行われると、ベルギーは一九三五年には永世中立政策への回帰を宣言した。しかし、三九年には再び中立政策を放棄し、ドイツとの抗戦の道を選ぶことになった（前掲小川書、六九―七〇頁）。

（12）こうした経緯については、前掲波多野書、前掲永井書、前掲梶田論文など参照。

（13）前掲梶田論文、四五―四六頁。

（14）二一年二月一日付内田外相発在仏石井大使宛第一〇三号電報、『日外①』五一〇頁。以下、一九二一年の電報史料の場合は、年表記は省略する。

（15）二月五日付在仏石井大使発内田外相宛第一七一号電報、『日外①』五一三頁。

（16）二月四日付在白安達公使発内田外相宛第三三号電報、『御巡遊記八〇』、識別番号：85537、七―八頁。

（17）二月五日付在蘭田付公使発内田外相宛第七号電報、『日外①』五一三頁。

（18）前掲梶田論文、五〇―五四頁。

（19）四月二〇日付在白武者小路臨時代理公使発内田外相宛第一〇二号電報、『日外①』五五六頁。

（20）四月二〇日付在白武者小路臨時代理公使発内田外相宛第一〇二号別電、『日外①』五五七頁。

（21）五月三日付在英林大使発内田外相宛第五四七号電報、『日外①』五六二―五六三頁。

（22）五月八日付在白安達公使発内田外相宛第一二二号電報、『日外①』

五六五頁。

(23) 『実録　三』二一年五月九日条、一二八―一二九頁。

(24) 五月一三日付駐英林大使発内田外相宛第五九四号電報『日外①』五七二―五七三頁。

(25) 五月一〇日付在英林大使発内田外相宛第五八二号電報『日外①』五六七―五六八頁。

(26) 五月一二日付林駐英大使発内田外相宛第五八七号電報、『日外①』五七〇頁。

(27) 五月一二日付内田外相発在英林大使宛第二九九号電報『日外①』五七〇―五七一頁。

(28) 五月一七日付在英林大使発内田外相宛第六二五号電報、『日外①』五八四頁。これ以降の日程調整は、現地大公使を介して、訪問国と珍田供奉長の間で行われることになった（二一年五月一八日付在英林大使発内田外相宛第六三六号電報、「御巡遊記八一」、識別番号：85538、一六―一七頁）。

(29) 五月一七日付在英林大使発内田外相宛六二三電報、『日外①』五八三―五八四頁。

(30) この問題の経緯については、前掲磯見・黒沢・櫻井書、第三部第五章、三三〇―三四三頁に詳しい。以下の記述について、註記がない限りは本書の記述に依拠している。

(31) 『実録　三』同日条、四七五頁。天皇に代わり裕仁皇太子が信任状の奉呈を受けている。

(32) 六月一二日付在白安達大使発内田外相宛第一五一号電報、『日外①』六〇三頁。

(33) 前掲磯見・黒沢・櫻井書、二五五―二五七頁。

(34) 二月一七日付内田外相発林在英大使宛第八八号電報「御巡遊記八〇」一三―一四頁。

(35) 二月一九日駐白安達公使発内田外相宛第四六号電報、外務省記録「皇太子裕仁親王殿下御渡欧一件　仏、白御訪問ノ部」（外務省外交史料館所蔵、L.1.30.6-3）所収。なお、この段階では、第三艦隊は五月三一日～六月五日の期間、オーステンデに碇泊する予定が立てられていた（「皇太子殿下海外御巡遊記外記　第二」識別番号：85592、二三―二六頁）。

(36) 五月一九日付在白安達公使発在英林大使宛第四六号電報、「御巡遊記八一」一九―二〇頁。

(37) 五月二〇日付在白安達公使発在英林大使宛第四七号電報、「御巡遊記八一」二〇―二一頁。

(38) 五月二一日付在英林大使発在白安達公使宛第一三三号電報、「御巡遊記八一」二三―二四頁。

(39) 五月二三日付在白安達公使発在英林大使宛第四九号電報、「御巡遊記八一」二七頁。

(40) 五月二三日付在白安達公使発在英林大使宛第五二号電報、「御巡遊記八一」二八頁。

(41) 「大正一〇年公文備考　巻一三儀制二」（防衛省防衛研究所所蔵、アジア歴史資料センター、Ref：C08050148600、以下アジア歴史資料センターで閲覧可能な防衛研究所所蔵史料については、所収史料とレファレンスコード（Ref）のみ表記する）を参照。

(42) 「御巡遊記八一」二五―二七頁。以下の記述や史料引用で特別の断りがない限りは、本史料に依拠している。

(43) 「英皇載冠式挙行彰仁親王御渡英軍艦浅間高砂派遣の件」、「明治三五年公文備考　巻三儀制一」Ref：C06091372900。

(44) 「筑波、千歳報告二止（五）」、「明治四〇年公文備考　巻一四艦船六」Ref：C06091867000。

(45) 第二特務艦隊のベルギー歓待については、前掲磯見・黒沢・櫻井

書第三部第一章、二九九―三〇一頁参照。

(46) 前掲松尾書、八二頁、前掲栗原書、一一七―一一八頁。

(47) 鹿島平和研究所編『日本外交史第一四巻　国際連盟における日本』（鹿島研究所出版会、一九七二年）一八一―一八三頁。

(48) 安達の国連連盟における活動とその意義については、柳原正治・篠原初枝編『安達峰一郎』（東京大学出版会、二〇一七年）に詳しい。

(49) この点は、井上寿一「安達峰一郎と国際協調外交の確立」（前掲柳原・篠原編書、第Ⅰ部第二章、四五頁）参照。

(50) 安達は国際河川条約の審議に先立ち「国際河川航行自由の理想」を演説した。「米国、南米、亜弗利加及亜細亜に於ける河川開放に言及し、殊に支那揚子江の開放が同国及外国の為富源開発上利益多かりし旨」と「機械の発明より河川の交通上に貢献すること益々大なる」旨を力説し、国際河川条約成立を呼び掛けていた（三月三〇日付松田代表委員発内田外相宛交通第五九号電報、『日外②』八四三頁）。

(51) 二月一二日付内田外相発在中小幡公使宛第二三号電報『日外②』七六七―七八一頁。

(52) 二月二四日付内田外相発在白安達公使宛第二六号電報『日外②』七八四―七八七頁。

(53) 三月二日付内田外相発在白安達公使宛第三七号電報、『日外②』七九一頁、三月五日付在白安達公使発内田外相宛第六八号電報『日外②』七九二―七九三頁。

(54) 四月一八日付松田代表委員発内田外相宛別電交通第九八号電報、『日外②』八九〇―八九一頁。

(55) 五月三日付在仏石井大使発内田外相宛第六八二号電報、『日外②』九一九頁。

(56) 『実録　三』同日条、三〇四頁。

(57) 主な研究として、章霖「大正期における海軍の艦隊行動と地域社会」（『史学雑誌』一二九―九、二〇二〇年）、同「一九二二年「日本一周巡航」と日本海軍の宣伝活動」（『年報近現代史研究』一三、二〇二一年）がある。